

「よお、姉ちゃん」……  
あいらん地区に行つてきた

「焼けたな。皮むけたんと違  
う？」

会うなりA子に言われた。関西弁訛りのY子は日本人形のように白い焼けたMの腕をつまんで、「うわ、しかも痩せた。私はここに砂漠に行つて迷子になつてもいいように一食分蓄えてるからな」。自分の二の腕をさすり大口で笑う。

「Y子は夏にどこか行つた？」と聞くと、「あいらん地区つて知つてる？ そこに行つてたん」。あいらん地区とは大阪市西成区の愛称。西日本最大のドヤ街として知られている。Y子はそこへ友人と2人で行つたという。

東京で見えるホームレスは、ダンボールで家を作り、身体もこぎれいにしてあることも多い。「けど、あいらん地区はな、道のいたるところにほんまに家のない人たちがごろごろしてる」。日雇い労働の紹介所病院、昔の遊郭の名残のようなどころもあった。あたりは排泄物の臭い

がする。皆、道のそこらじゅうで用を足してしまふのだそう。話を聞きながら、ちよつと言葉を失つて沈黙したMの表情を見て、Y子は笑う。

「そんな顔せんといてやー」「あのね、うちもちよつと誤解しててん」とY子は再び話し始めた。頭に思い描いていた以上の衝撃があつたようだ。その道を歩きながら、ホームレスに何度も話しかけられたという。「よお姉ちゃん」と。はじめ、その雰囲気息をのんでいたY子は話しかけられても返事をしないで歩いてた。「その時にな、ほんまに悲しそうな顔をするん、寂しそうと言ふんかな。下を向いて」

そのことに気づいてから、Y子は道で挨拶されると必ず笑顔で返事をするようにした。「途中声かけられてな。何しに來たつて」。少しドキッとした。「そしたらな、町の中案内してもらつた。すごい詳しくて。親切やつたなあ」

「夏休み、何していたの」「夏期講習三昧だったよ」受験生の会話みたいだが、教えるほうの学生話。総合政策学部のK君は、いま話題の派遣会社から派遣されている塾講師で、時給は1300円。「まあ、いいほうじゃないの」と言つたら、「あり得ない」とKはムクれた。塾講師の派遣は聞きなれないかもしれないが、個別指導で名高い大手塾などではアルバイトだけでは人手が足らず、その分を派遣会社から雇うのが普通だという。アルバイトだと何時間も研修をする必要がある一方で、派遣講師に対しての研修はゼロ。彼がなぜ不満かと言えば、時間外労働が多すぎるからだという。「1時間の授業をする陰には、3時間の無給の時間外労働があるんだもの」生徒指導から、保護者との面談、そして授業準

派遣・塾講師もつらいよ  
「時給1300円、じつは……」

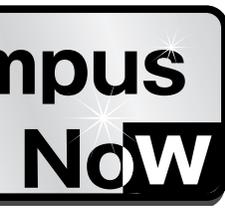
「夏休み、何していたの」

「夏期講習三昧だったよ」受験生の会話みたいだが、教えるほうの学生話。総合政策学部のK君は、いま話題の派遣会社から派遣されている塾講師で、時給は1300円。「まあ、いいほうじゃないの」と言つたら、「あり得ない」とKはムクれた。塾講師の派遣は聞きなれないかもしれないが、個別指導で名高い大手塾などではアルバイトだけでは人手が足らず、その分を派遣会社から雇うのが普通だという。アルバイトだと何時間も研修をする必要がある一方で、派遣講師に対しての研修はゼロ。彼がなぜ不満かと言えば、時間外労働が多すぎるからだという。「1時間の授業をする陰には、3時間の無給の時間外労働があるんだもの」生徒指導から、保護者との面談、そして授業準

備など、それらはすべて時給の内。加えて、授業開始の1時間前に出勤するというおまけつきだ。1300円を単純に3で割れば433円。東京都の最低賃金でさえ時給715円というのに。怒りをかき立てるのは、同じ働き方をしながら、通常のアルバイト講師は時給2200円という「格差」。その差、900円。そっくり派遣会社のピンハネ、いや取り分かどうかは調べてみなければ分からないが。

「非正規雇用をあつせんするいわゆる人材派遣というようなもの、昔でいえば口入れ稼業ですな」といった発言も参院総務委員会（05年3月17日）の記録にある。ちなみに答弁者は麻生太郎・当時総務大臣である。派遣労働法が導入された当時、「多様な働き方ができる派遣労働は、労働者の専門性を生かして働くことができ、労働者の強みとなる」と言われていたが、適用職種が拡大されて

一皮むけたのはY子のほうじゃな  
いかなあ。Mはそう思った。（明）



いくにつれて、なだれのように賃金が落ち待遇も落ちていった。

「そんなとこ辞めちゃえばいいじゃないか、即座に」と唆（そそのか）すと、「契約が半年だったからね」。Kの律儀なところである。「それに子どもから見ると、派遣でも、アルバイトでも、社員でも『みんな同じ先生』です。だからこそ、辞めるに辞められずにズルズルと」

夏期講習が無料になるキャンペーンがあった。ひとり熱心に勉強する生徒がいて、Kも目に留めていた。

2学期の受講を勧めると、その生徒は寂しげな顔でポロリと漏らしたという。

「うち、お金がないから塾には通えないんです」——そんなこともあってね、とKは話した。教育者としての顔と、派遣社員としての顔。

「自分の働き方も含めて、格差が広がっているなど実感した夏休みでした」

社会性に目覚めて物思う、K君の秋である。 (創)

## ナントカナルシズムが羨ましい 前期試験終わりの楽観と悲観

「試験開始から、30分たちまして、帰って結構です」。カッカカッカ……。さつそうと、教室からでて行ったのはA子だった。夏休み前の前期試験。ここを突破すれば長く楽しい夏休みが待っている。

A子は、親友Tを教室の外で待っていた。「けっこう簡単な試験だったわ。まあ余裕で単位は取れる」と、そう確信しながら……。

すると、ようやくTが出てきた。

「お待たせーっ」といつもの笑顔で。きょうは、帰りがけに日替わりソフトクリームを食べる予定だ。「パイン味だよ。楽しみ楽しみ」

ぺちやくちやししながら、さつきの試験の話題。A子が「あの問題って、〇〇は××でいいんだよね？」

でもって△△は〇〇だよ」と確認すると、Tは驚いた表情で言った。「△△が××。〇〇は□□だよ」。



みるみるA子の顔が、火照ったピンクから青白くなってきた。

あわててTが「大丈夫、大丈夫。気にすることないって。出席しているんだしさ」と慰めにはいる。しかし、A子の耳には全く聞こえない様子。

A子は根っからの心配性なのだ。春、履修科目を決める時にも、保険に保険をかけて組んだり、試験結果の前日はドキドキして眠れなかった。この時期、A子からの相談メールで、Tの受信ボックスはいっぱいになる。Tは「また、この時期がきた。一年たったのね」と思うらしい。

「だいたい、A子は、いままで一度も単位を落としたこともないうえ、

## 「私大の学生証はただの紙切れ」 銀行に並んで募るイライラ

学費の振込みにきたT君は憤慨した。「30分も待たせたあげくに、あれを書け、これを書け……」

しまいには、『ご本人様ですか』。俺は俺だつていうの！」

まあまあ、と怒りが爆発する彼を

真面目に授業に出ているから、こんなに心配することないのに」と呆れられるほどである。

ようやく落ち着きを取り戻したA子だが、やっぱり暗い。それを横目に「わたしなんてさ、持ち込み可のテストに、持ち込み道具を忘れたんだしさ」。カラツと言うTに「え？ それなのに、そんなに明るいの？」。A子には信じられない。「まー、テストなんてなんとかなるものだし、悩んでも仕方ないよ」。このナントカナルシズムが羨ましい。

その夜、一通のメールがきた。「A子の、そうやって何でも真剣に考えるところ、結構好きです(A)」

「このメール、保護っと」 持つべきは友である。 (花)

なだめながら、ある言葉が頭をよぎった。

「ふざけるなメガバンク」

週刊誌で見かけたキャッチコピーだ。銀行は、合併に継ぐ合併で支店数が減っている。お金を下ろすにも、

振込みをするにも、とにかく待つ。  
「急がば、回るな」が銀行利用心得の常識となつて久しい。

ゼロ金利は解除され利息は上昇したものの、スズメの涙。105円、210円と、お金を引き出すたびに手数料はきつちり取られる。なのに、先だって大手銀行は過去最高の収益を更新したというのだからいよいよ腹のムシが収まらない。

「僕は無理筋のクレマーじゃないからね」というT君のイラ立ちの最大は本人確認だ。平成15年1月から施行された「金融機関等における本人確認等に関する法律」でやけにうるさくなった。

何かにつけて、「ご本人様を確認できるものではありませんか」と聞かれ、免許証か保険証の提示を求められる。こんなとき、「私立大学の学生証」はただの紙切れにすぎない。「官の発行物でなければ」。これも、

日本人のお上意識の表れではないか。ここへきての官の不祥事続発はどうだろう。役所を性善説で見てきたナイーブな風土から変えなきゃ、と彼は強調するわけだ。

もちろん、本人確認はオレオレ詐欺を防ぐ社会的コストといえなくもない。一部のふとどき者の存在のゆえ、社会全体で見ると膨大な手間とコストがかかっているのだ。

「決まりですから」とオウム返しに窓口嬢とやりあつてどうなるものもなく、銀行に行くたびにT君はうつとおしい気持ちになる。そこで、T君はひとり静かに決意した。「金融機関にだけは就職しないゾ」

「頼まれても入行してあげない」といったニュアンスだが、幸いそこをまげて当行にという殊勝な銀行もないだろう。(望)

## 小学校のカレシと遭遇 嫌々はじめた塾講師の出来事

後 期も始まつて、秋本番。4年次の単位も取り終わつたし、

もうしばらく実家にいようかな、とA子はそんな



気分だ。

8月に入り、帰省しバイトを始めた。まずは塾。夏期講習のバイト。そして情報サイトの会社。こちらは、経理やWeb制作。

「塾なんて行つたことないし、あの雰囲気がいや」と、A子は塾講師のバイトだけは避けてきた。

が、やらざるを得ぬハメになった。断りもなしに、A子の妹が勝手に応募の電話をしてしまったのだ。仕方なく、面接に行き、試験をうけ、採用。自慢ではないけど、とA子は言う。国語が満点だったらしく、「社員として働いてよ」と塾長に口説かれちゃつたのよ、と。学生記者ですもの、エヘン！

初日。半ば嫌々ながら、塾へ。すると、タイムカードに小学校のときの同級生の名が2人。まさか、と頭をよぎつた瞬間、目の前にひとりが立っていた。「あらあ」と互いに声をあげて、彼とはこれを機に仲良くなったのだが、

問題は、もう片方の彼である。じつは、小学生のときに好きだった人なのだ。10年ぶりのだから、やはり見てみたい。

2日目、運命の再会！ おく変わったくないではないか！ シャイな性格も健在。とはいえ、左手に指輪がキラリ。彼女かしら？ ちよつと気にはなるが、その場は見てもぬふりして、急いだ。「さ、授業たわ」

受け持ちは中3生。明るい性格で良い子なのだが、授業にならない。授業をしようとする、「先生、亀梨(ジャニーズJr.)くん知ってる？ わたし、結婚したいんだけど、どうすればいいの？」とか「わたし、タレントになる」とか、はなから人生相談。それならと、真剣になつて答えようとすると、「授業やるよー」とからかわれる……。先生つてほとほとムズカシイ。

夏休みが過ぎて、A子の2つのバイトは継続している。どちらも楽しいのだ。

思いがけず始めたバイト。思いがけず出会つた同級生。ちよつと尾を引きそうな、一夏の思い出である。(亀)